

文學建設

復刻版 全10巻・別冊1

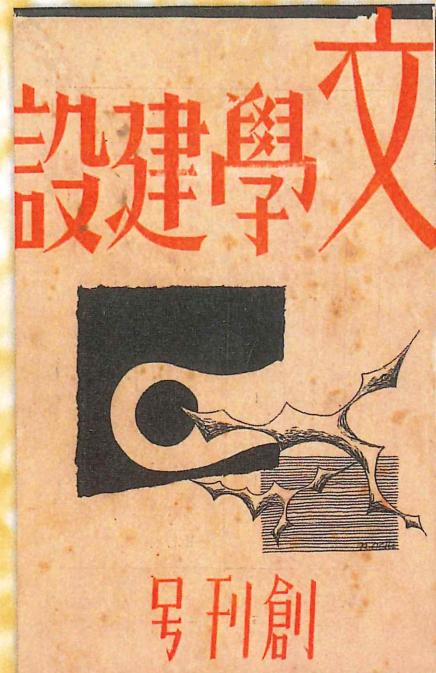
海音寺潮五郎らによって戦中に刊行された
幻の文芸雑誌がついに全号復刻!!

本誌は昭和14年(1939)に海音寺潮五郎を中心に創刊された文芸雑誌である。戦争による文化統制が強化される中、「定型主義の打破」「道徳性の昂揚」「先駆性の復興」をスローガンとして掲げ、5年間で計56号を世に送り出した。同人は村雨退二郎、中澤翠夫、戸川貞雄、筈本寅ら42名。あくまで文学の自立性/自律性を守ろうとする彼らの決意は、毎月の創作はもとより他誌への厳しい批評からも伺える。昭和17年(1942)発行元を聖紀書房に移して雑誌統合を免れ、昭和18年(1943)『文芸春秋』と合併。「文学建設運動」は国民文学運動と連動しながら、大衆文学に強烈な社会的自覚を残してその役目を終えた。まさに戦時下の文学の粹であつた本誌が、戦前と戦後を接続し、今日の日本文学研究に大きく寄与するものと確信する。

主要執筆者

海音寺潮五郎、戸川貞雄、中澤翠夫、岡戸武平、戸伏太兵(綿谷雪)、早川清、蘭郁二郎、東野村章、土屋光司、村雨退二郎、北町一郎、山田克郎、由布川祝、浅野武男、村松駿吉、岩崎榮、緑川玄三、鹿島孝二、戸川静子、鯉城一郎、土岐愛作(花村獎)など

- 底本 『文學建設』創刊号～第5巻第9号
(文學建設社/聖紀書房発行昭和14年1月～18年11月)
- 監修・解説 三上聰太(立命館大学客員研究員)
- 体裁 A5判・上製・総約4,500ページ
- 別冊 解説・総目次・索引
- 予価 全巻揃237,050円(本体215,500円+税10%)
別冊のみ分売可。定価3,850円(本体3,500円+税10%)
- 推薦 古閑 章(鹿児島純心大学名誉教授・小説家・文芸評論家)
石川 巧(立教大学教授)
- 全5回配本予定



○推薦のことば

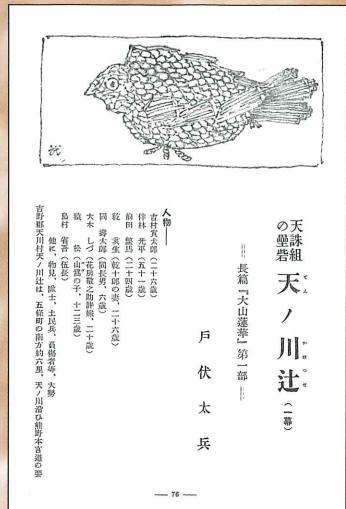
『文學建設』の復刻を寿ぐ

大正末年～昭和初期の代表的なリトルマガジンに『青空』（一九二五・一～二七・六。全二八冊）がある。この『青空』を拠点に活動したのは梶井基次郎（一九〇一～三二）であった。『青空』が日本近代文学史に不動の位置を占めるのは、梶井の初期の代表作や、後に大成した中谷孝雄や外村繁、三好達治や北川冬彦らの作品が『青空』に掲載されているからである。

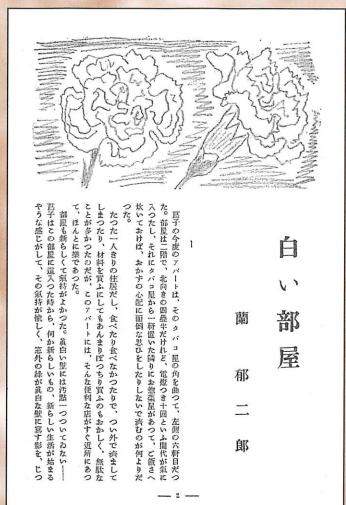
このたび、稀少雑誌復刻の専門書肆・不二出版が刊行する『文學建設』は、数多くの歴史小説や史伝小説を書いた海音寺潮五郎（一九〇一～七七）が守り立てた文芸雑誌であり、未永く記憶されると確信する。たとえ『青空』と『文學建設』に具体的な関係を指摘することは出来ないとしても、文学者としての梶井基次郎と海音寺潮五郎の稀有名な事績が両誌の内実を保証し、雑誌としての価値を不滅にするという意味では、間違いなく相似た性格を有している。

『文學建設』は、日中戦争序盤の一九三九（昭和一四）年一月～大東亜戦争終盤の一九四三（昭和一八）年十一月の五年間に、全五六冊を刊行した。創刊前年の三月には、内務省警保局の言論統制によって宮本百合子や中野重治らが執筆禁止に追い込まれ、文筆生活者の現実は日増しに息苦しくなるばかりであった。

海音寺は、一九三六（昭和一二）年八月、「天正女合戦」や「武道伝来記」で第三次直木賞を受賞し、着実に時代小説家としての地歩を築いた。けれども、一九三八（昭和一三）年九月～十二月にかけて『サンデー毎日』に連載し好評を得た『柳沢騒動』が、時局に合わぬという理由で断筆を余儀なくされた。旺盛な反骨精神の持ち主であった海音寺が『文學建設』を旗揚げした理由の一斑には、秘かに「続 柳沢騒動（全五回）」を発表する意図が隠されていた。



戸伏太兵「天ノ川辻」
(第2巻第1号より)



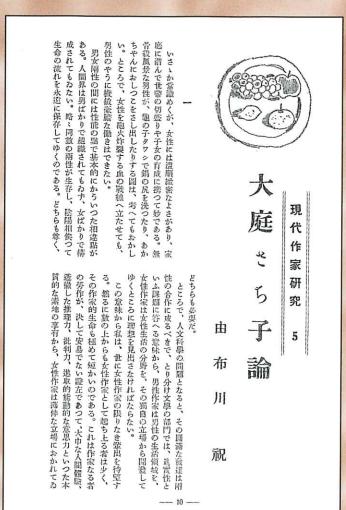
蘭郁二郎「白い部屋」
(第2巻第2号より)

鹿児島純心大学名誉教授 小説家・文芸評論家 古閑 章

一九七七（昭和五二）年十二月一日、海音寺は享年七七歳で逝去し、二年後の十二月、海音寺文学を顕彰する財團法人海音寺潮五郎記念館が設立される。そしてその記念事業の第一弾として企画されたのが、八〇（昭和五五）年十月、海音寺文学における『文學建設』の価値を闡明にした『文學建設 総目次』の刊行であった。

『海音寺潮五郎記念館誌』創刊号（一九八〇・十、八一・三）に掲載された中澤至夫と尾崎秀樹の対談「文學建設と海音寺文学」には、『文學建設』創刊～文芸春秋に統廃合されるまでの時代背景や、海音寺を初めとする同人の動静が事細かに回想されている。実際の目次に当たると、「文學建設 連続座談会（全五回）」「特輯 大衆作家総批判」「特輯 歴史文学の進路」「特輯 国民文学研究」「特輯 国民文学と大衆雑誌」「現代作家論（全一二回）」等の時宜に適ったテーマが、用紙不足で印刷もままならぬ状況下で取り上げられている。

『文學建設』は、立命館大学客員研究員の三上聰太氏が、古書店で発見入手した『文學建設』の復刻を心から寿ぎたい。



由布川祝「大庭さち子論」
(第4巻第5号より)

文學建設・新年號・目次

早變りと文學 (巻頭言) 阿川 滉一

若き日の頁 戸川 静子 早川 清置

作品天ノ川辻 (戯曲) 戸伏 太兵 天

文人寸言 同人 建設 文學

「船密」南洋文學 雜誌作品批評 聲書

聖戰の春 僕 (一) 僕 (二) 僕 (三)

昭和十五年への期待 好信 好信 好信

今年はどう笑ふか 壬田 壬田 壬田

轉落の詩集寫言 城 城 城 城 城

山田 克郎 克郎 克郎 克郎 克郎 克郎 克郎

ユーモアクラブ新年號批評 海音寺潮五郎 五郎



研 究・考 證

- サンデー毎日新春特別號讀後感 由布川
- オール讀物新年號評 Q. 美
- 現代新年號評 土屋光司
- 週刊朝日新年特別號を讀む 一讀者
- 海外の大衆作家 (1) 土屋光司
- 香具師隱語漫考 松浦泉三郎

知板

- 編輯者の言 (特別寄稿) 佐野孝
- 漢字と綴方 北町一郎
- 連續する偶然 岡本京三
- 家・赤ん坊その他 右田和郎
- 人消息 同人住所録



筆 隨 評 告 研 究・考 證

『文學建設』第2卷第1号（1940年1月号）目次

敵襲
モーリス・コリスといふ人が、一九三七年の秋書いた手記の一節に、次のような文がある。英國資本の、スチール株式会社といふ大會社の、英人社員の寄宿舎があつた。寄宿舎の大部分は、ビルへ来て間もない連中だつた。毎朝九時に出勤し、夕刻六時前に歸ることには疎だつた。この熱帯の方では、日が非常に水がつたのだ。若い彼等は、午後七時から、八時半までの間は、好きな娛樂に打ち興じ、それから夕食を食する。毎日曜日の午後は彼等の天地で、ゴルフやテニスなどをやつたあと、きれいな女の友人や要人をられて来たり明かすのであつた。

われくビルマ方面軍の宣傳員は、右のスチール會社アバトメンツを宿舎にしてゐた。ラングーンへばん最初に入した〇師團と一緒に、わが宣傳隊の一部も、ビルの首都に踏み込んだ。そして、ラングーンの山の手と下町の境界線にある、だから街の入口とモーリス・コリスが書いてゐる地點に、凹型に、堂々と建つ白亞の大建築即ち、スチール會社の英人獨身社員の

白衣の帰還 (1)

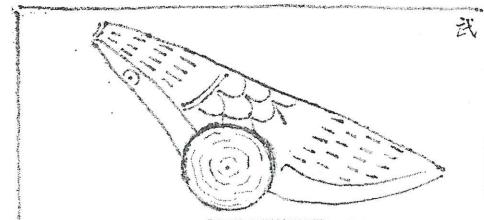
陸軍宣傳隊嘱託

岩崎榮

榮

— 11 —

岩崎榮「白衣の帰還」(第5卷第1号より)
後期には従軍記のような作品も見えるようになる



續・柳澤騒動 (第一回)

海音寺潮五郎

作者自序
この作の前篇は、年後半期第十七回に亘りてサンデー毎日に發表しました。ものが前篇をお読みにならなかつたために、やゝ詳しげの紙をつけました。御覧倒でも、もう一讀の上、本文をお読み下さるやうお願ひいたします。

前篇の梗概

三代光重 四代家綱 五代吉 六代綱豐 (後の家直) 申府家 箕林家
右の系図の示すやうに、箕林家相繼綱子がなく、また次兄綱重が早死したので五代の將軍となることが出来た。

— 80 —

海音寺潮五郎「續・柳澤騒動」(第1卷第4号より)
『サンデー毎日』で連載されていた『柳沢騒動』の続編

文学を「建設」するという壯志

立教大学教授 石川 巧

一九二〇年代から一九三〇年代の文学状況にあつて、〈作家〉になるための近道は雑誌編集者や新聞記者になることだった。なかでも、大衆文学の領域では急激に拡大する読者の期待に応えるために新しい書き手が求められ、〈作家〉へと転身する編集者や記者が少なくなかった。当時は、中里介山、菊池寛、大佛次郎、吉川英治、長谷川伸、子母澤寛、白井喬二といった流行作家が圧倒的な人気を誇っていたが、雑誌の企画や出版に通じる新しい書き手たちは、自らを新興勢力と称して既成文壇を挑発した。

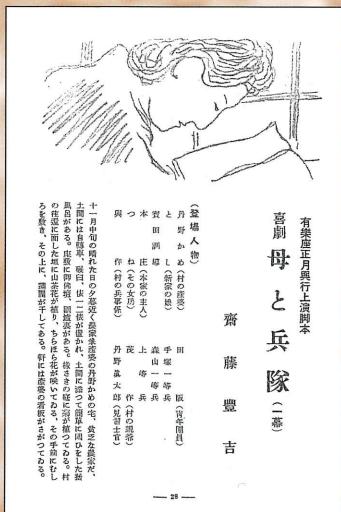
東京社の編集者だった戸川貞雄、大阪時事新報社、大阪毎日新聞社、東京日本新聞社の記者を経験した岩崎栄、春秋社において中里介山の「大菩薩峠」を担当した笠本寅、時事新報社の記者だった片岡貢、そして、直木賞を受賞したばかりの海音寺潮五郎が中心となつて創刊した『文學建設』（一九三九・一・一九）もそのひとつである。彼らは貴司山治が主導した『実録文学』（一九三五・一〇・一九三六・四）から出発しているが、『文學建設』の特徴は、そこに博文館の岡戸武平、乾信一郎、三木蒐一、玉川一郎らが合流し、さらに、新潮社で『文學時代』や『日の出』の編集に携わった納言恭平、早川書房を設立し

創刊号の「卷頭言」で、「國民の生活的伝統に根差し、文學本来の広大な道徳性を具有するところの文學」を「建設」すると宣言した彼らは、「大衆の低俗な一面の趣味と感傷」に迎合した大衆文学を正面から批判し、「無責任な史実上の誤謬や無知」に「筆誅」（戸川貞雄『国防文學論』育生社弘道閣、一九四一・三）を加えると宣言した。國家総動員体制が日々強化される時代にあって、敢えて正しく歴史認識に基づく国民文学を標榜した。戦時に創刊された同人雑誌の多くが短命に終わるなか、『文學建設』は五年近くに亘って継続された。『文學建設』に集つた〈作家〉たちは、戦後も様々な文芸雑誌に携わり新しい時代の出版文化を支えた。

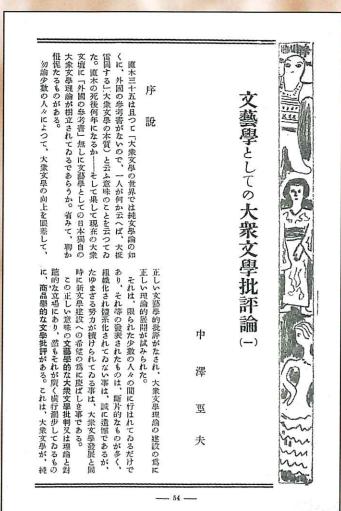
今回の復刻によつて、私たちは戦時下における国民文学の実相を知ることができる。同人雑誌は作品を発表する場であると同時に、〈作家〉たちが自らの理念をかたちにする運動でもあるという事実を追認することができる。そして、彼らの表現を通して、同時代を生きた人々の期待の地平を探ることができる。



海音寺潮五郎「マライの支那人」
(第5巻第5号より)



齋藤豊吉「母と兵隊」
(第3巻第1号より)



中澤平夫「文芸学としての
大衆文学批評論」
(第2巻第5号より)

た早川清、婦女界社の北町一郎などが加わっていることである。四〇名を超える同人のうち編集者や記者出身は約半数を数える。

○配本情報

配本	復刻版巻数	原誌巻数	原誌発行年月	予価	刊行予定
第1回配本	第1巻	創刊号～第1巻第6号	1939年1月～6月	定価 48,400円 (本体44,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8756-6	2023年12月
	第2巻	第1巻第7号～第12号	1939年7月～12月		
第2回配本	第3巻	第2巻第1号～第6号	1940年1月～6月	定価 48,400円 (本体44,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8759-7	2024年4月
	第4巻	第2巻第7号～第12号	1940年7月～12月		
第3回配本	第5巻	第3巻第1号～第6号	1941年1月～6月	定価 48,400円 (本体44,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8762-7	2024年7月
	第6巻	第3巻第7号～第11号	1941年8月～12月		
第4回配本	第7巻	第4巻第1号～第6号	1942年1月～6月	定価 48,400円 (本体44,000円+税10%) ISBN 978-4-8350-8765-8	2024年10月
	第8巻	第4巻第7号～第12号	1942年7月～12月		
第5回配本	第9巻	第5巻第1号～第4号	1943年1月～4月	定価 43,450円 (本体39,500円+税10%) ISBN 978-4-8350-8768-9	2025年1月
	第10巻	第5巻第5号～第9号	1943年5月～11月		
	別冊	解説・総目次・索引			

○関連書籍のご案内

文藝春秋社 発行〔昭和11年～昭和19年刊〕

文學界 全42巻・別冊1

本誌は昭和8年に創刊された文芸雑誌の雄である。

創刊当時の編集同人は武田麟太郎、林房雄、小林秀雄、川端康成、深田久弥、広津和郎、宇野浩二の7名。創刊以来、個人主義と芸術主義を積極的に主張する立場を明確に掲げ、昭和10年代文学に極めて大きな役割を果たした。

- 別冊=解説（樋原修・田中勵儀）・総目次・索引
- 予定価693,000円（本体630,000円+税10%）
- 推薦=池内輝雄・栗原敦・紅野敏郎・長谷川啓

改造社 発行〔昭和8年～昭和19年刊〕

文藝 全60巻・別冊1

『文藝』は満洲事変を境に思想弾圧が強化されプロレタリア文学が壊滅するなか、新たな文芸復興の機運を背景として創刊された。創作、評論を中心とし、海外文学も積極的に紹介したが、太平洋戦争開戦後の文芸雑誌に対する一層の監視下、戦時色が際立つ誌面となり、1944年軍部の圧力により廃刊に至った。

- 別冊=解説（山下真史）・総目次・索引
- 予定価1,051,600円（本体956,000円+税10%）
- 推薦=安藤宏・太田哲男・川津誠・木村一信

日本文学報国会 刊〔昭和18年～昭和20年刊〕

文学報国

本紙は、太平洋戦争下の昭和17年5月に、国策の周知徹底と宣伝普及のための情報局の指導により発足した日本文学報告会の機関紙である。言論の自由を完全に奪い去った後の文化統制下の知識人・文化人の状況を明らかにし、帝国主義戦争と文学とアジアの問題を考える重要な材料として復刻するものである。

- 解題（山内祥史）・解説（高橋新太郎）・総目次・索引付き
- 予定価19,800円（本体18,000円+税10%）
- 推薦=尾崎秀樹・小田切進・久保田正文

文芸懇話会 刊〔昭和11年～昭和12年刊〕

文芸懇話会 全2巻・別冊1

本誌は、文壇・文学者のファシズム統合への道を拓いた官民合同の文学団体=文芸懇話会の機関紙である。同会は1934年3月、内務省警保局長松本学が文化統制を目的に直木三十五らを抱え込んで創立、大衆文学・自由主義までの多くの作家を取り込むことに成功した。国家の文化政策とそれに対峙する文学者とのせめぎあいを明らかにする。

- 別冊=解説（高橋新太郎）・総目次・索引
- 予定価58,300円（本体53,000円+税10%）
- 推薦=海野福寿・榎本隆司

振 F T
A E
替 X L
0 0 0 東京
0 3 3 都
1 5 5 文
0 8 8 区
2 1 1 水
9 6 6 道
4 7 7
0 0 0
8 5 4
4 0
0

不一出版

表示価格はすべて税込